



隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小」

隈府小学校
学校だより No12
文責 芹川博文
6月27日(金)

本物に触れる学び 「楽しみ力」の大切さ

～ 3年生が参加した観劇会から ～

「みんな笑顔だったから、またみんなで演劇教室に行きたいです。」
「お母さんが、『残さないで』という意味が観劇会でわかりました。」

上記の子どもたちの感想の言葉からも、楽しく食育につながる学びだったことが伝わってきます。菊池市内の3年生が一堂に会し、泗水ホールで行われた観劇会。引率された先生方から「子どもたちの反応が良く、とても喜んで観ていました」との報告に、こちら嬉しくなりました。そして、本物に触れる学びと、「楽しみ力」の大切さを改めて感じました。

以前、カタールのドーハ日本人学校に勤務した時の観劇会を思い出します。会場に入ると、いくつもの国々（アメリカ系やカナダ系などの）の学校が参加していました（カタールは外国からの企業が多く、当時国内の6/7は外国人でした）。司会者が、「沢山の学校が参加してくれてありがとう！アメリカン・スクールのみんなは何処かな？」の問いかけに、「オー！イエーイ！」の大きな反応。多くの学校が大盛り上がりの中、「ジャパニーズ・スクールは？」の問いかけに、日本人学校の子どもたちは、緊張のあまり反応できず、静かに拍手をするくらいでした。引率していた私は、「しまった」と反省と同時に大きな衝撃を受けました。「静かに」「行儀よく」がマナーだと事前指導して参加した観劇会。ところが、「劇は舞台の役者だけでなく、観客も一緒につくる」のが国際的なマナー。自分で判断し、静かに聞く場面と、思いっきり盛り上がる場面の区別をつけていく力の大切さ、そして外国の学校の子どもたちの「楽しみ力」のパワーの違いを痛感した出来事となりました。

今回、3年生は存分に劇を楽しんだようです。静かに行儀のよい日本文化の良さを大切にしながらも、これからの時代を生きていく子どもたちに伸ばしてほしい力の一つだと考えます。



今回の劇の元となる絵本。作者であり、劇で読み聞かせをされた徳永玲子さんから頂きました。

言葉で思いをどう伝えるか ～ 人権集会から ～

右の写真は、1年生の人権集会と5、6年生の人権集会の様子です。それぞれ学年で、学習した人権学習や生活の中で感じた思い、特に日ごろ使っている言葉について考え、思いを伝え合っていました。

部落差別をはじめあらゆる差別に対して、気づき行動していく力は、突き詰めれば「日常の言葉や会話」につながっていくのかもしれませんが。

戦後80年の節目の夏を迎えます。今週6月23日の沖縄慰霊の日、追悼式で小学校6年生が発表した「平和の詩」（裏面に記載）からも、思いを受け継ぐことの大切さを感じます。

世界では、暗く悲しい報道が続きます。先日は、私が3年間住んでいたカタールへの攻撃のニュースが流れました。カタールは秋田県と同じくらいの面積の小さな国。車で移動中、「ここから先はアメリカ軍の基地」という場所を通った記憶が蘇ります。カタールで出会った人々、そこで暮らす人々の顔も思い浮かびます。

様々な人々の思いや生きざまに触れること、日常の言葉を大切にすることを心掛けて生活していきたいと思えます。

「目には目を」を行えば、この世界を盲目にするだけだとガンジーは言った。憎しみは憎しみでは消し去ることはできない。暴力は暴力では消し去ることはできない。（「人はなぜ争うの？」岩川直樹 著）



カタールのドーハ郵便局の駐車場からの風景。手前の車(左)は、当時私が乗っていた愛車です。